

第十一講 テキスト批判

【レポート講評】「文字テキストとは何か。文字テキストを扱う際に注意することは何か。」

先ず「文字テキストとは何か」について定義を試みるレポートがいくつか見られた。歴史に関わる資料を文字で表したものと定義するのがいくつかあった。当たり前といえば当たり前なのだが、文字によって表された資料というのは文字テキストの本質そのものであることには変わりはない。その上で資料が史料として扱われていくその理由として歴史との接点が求められていく。文字テキストを通じて歴史を学ぶ、というのは史料としての性格をよく示しているものと言えよう。偶然または必然的な理由によって現在まで残ったものという定義が目をつけた。これは我々が実際に文字史料をテキストとして扱う際にテキストの性格や時代性、伝承など考慮しなければならない事柄に関わる問題を提起しているからである。また文化史（歴史）研究を進めていくうえで、文字テキストは非常に重要な位置を占めているが、そのことについて「仮説を証明する論拠になる」という当たり前だけど、大事な事実に触れているレポートも見られた。

次いで文字テキストの種類について事例を挙げようとする態度が多くレポートに見られる。書籍、文書、碑文、竹簡、木簡、手紙、条約、ポスターなどの具体的な例が見られる。ただこの中には同じ文字テキストといっても原本と写本、印刷本の区別を行なって、原本の史料的価値の大きさを指摘するレポートもあった。

最後に文字テキストを扱う際に注意すべき点として、様々な意見が述べられていた。テキストの信憑性を検査しなければならないという意見が最も多かった。その理由として文字テキストには書き手による誤謬や脚色、誇張、無視などがあるだけでなく、後世写されていく過程で生じる脱落やミス、要約、削除、書き足し、写字生によるメモの混入などが起こるからである。第二に言葉の意味やニュアンスが時代とともに変化していき、終には全く分からなくなっていくことも起こり得るので、テキストが書かれた時代や社会の言葉の意味やニュアンスを正しく理解することが重要だ

と指摘される。このような例は 19 世紀末のドイツ語のような近代語でも生じているので文字テキストを扱う際に求められる重要な事であろう。第三にテキストそのものが必ずしも事件や現象について客観的に、価値中立的に書かれている訳ではないので、必ず複数の文字テキストを読み比べて事実の検証を行なうことが求められていると考えているレポートも数多くあった。ここでの指摘は非常に重要なことである。文書があるからそれが正しいという議論は単純で、幼稚な発想だろうということである。必ず同時代の別な視点からの史料と比較すること、それが求められているということになる。そしてその比較検証に用いるテキストは必ずしも文字テキストに限らないことは言うまでもない。考古学資料のような非文字テキストとの交差検証も場合によっては行なわれなければならない。

第四にそれが原本か二次的なものなのか、ということにも配慮することが求められていると言う。写本や印刷の過程で生じるミスのみならず、ディオドロスやプルタルコスなどの例に見られるように、ヘレニズム時代やローマ時代に常識化されていく、あるいは時代や社会の思考の枠組みによって方向づけられ脚色されていく過去の構築・評価の問題が派生するからである。

第五に前近代社会においては文字化されることにその時代や社会の階級や身分の排他性や独善性が見られるという指摘を挙げることができよう。これは多くの人気が気づかない非常に大事な史料テキストの側面に触れている。住民のほとんどの者が読み書きできる近代社会とは異なり、前近代社会では文字を読める、書ける、文字テキストを手にすることができる、文字テキストに接近できるというのは一部の人々の「特権」に所属することではあった。そのことの意味を考えていくことが文字テキストを利用するときに求められているというのである。

第六に誰が書いたのかに注意する必要があるという指摘もあった。これは書き手の立場の違いによって文書化するときの意識的・無意識的な作為、目論見、目的があるからである。これは必ずしも第一次世界大戦後各国外務省が刊行した白書などの刊行に限らない。多くのテキストを利用するときに常に注意しなくてはならないのがこの問題である。

最後に文字テキストだけでは知り得ないことは数多くあり、文字テキスト偏重は逆に問題を生じる危険性があるという指摘があったことも付け加えておかななくてはならないだろう。その上で、次のような質問があったことも紹介しておかななくてはならない。

「口頭だけで伝えられているような言い伝えはあるのか」という質問と線文字Aのような「未解読のものは文字テキストになるのか」という質問がそれである。それぞれ良い点を衝いていると思われる。前者はこの世の中何がしかの形で文字化されている筈だということだろうし、後者は書かれてあることが解読され、分析と評価が為されてこそテキストになるという考えに基づいている。前者については文字化されることの選択性、全体ではなくて記述の部分性、更には文字テキストの喪失を考えておかななくてはならないし、口頭伝承の変質・多様化の迅速さも念頭に入れておかななくてはならないだろう。従って前者については「あります」と答えることができる。後者については文字を通して解読・分析・評価ができないけれど、文字と判断できる限りは文字テキストだと位置づけることは可能だと思う。しかし「今のところ、中身は分からない」という限定つきではあるが。

【レポート課題】提示され、説明されたテキストを参考にして「カッリアスの平和」が実在したのか、後世の虚構なのか自ら判断し、それぞれ反証史料を批判してそのような判断に至った理由を述べなさい。

文字テキストの例

いわゆる「カッリアスの平和」について

テキストの性格

「カッリアスの平和」に関するテキストはすべて同時代のものではない。

次の世紀以降のテキストが史料として伝えられている。

テキストの数もそれほど多くはない。

テキストの情報源は何れもアテナイに集約される。

同時代史料である『アテナイ貢税表』（碑文）が援用されるが、その編纂については批判があり、決定的とは言えない。

年表 1 : 五十年期 の年表 (年代はすべて紀元前)

- 479 プラタイア及びミュカレの戦い
- 478 ヘラス同盟軍、ビュザンティオン攻略・パウサニ阿斯事件
- 477 デロス同盟結成
- 476/5 キモーン、エイオン及びスキュロス攻略
- 470 ナクソスの反乱 (同盟国最初の反乱)
- 469 キモーンの遠征、エウリュメドーンの戦い・(カッリアスのペルシア訪問) →歴史的状況の変化: ペルシアの継戦意志への影響 (→カッリアスの平和?)
- 465 タソスの反乱 (~463/2)
- 465/4 デロス同盟軍、ヘッレスポントスへの遠征
- 461 キモーンの陶片追放→歴史的状況の変化: 和平への障害の消滅
- 461/0 エジプトのイナロスの反乱→歴史的状況の変化: ペルシアにとって二正面作戦の危機
第一次ペロポネネーソス戦争 (~446/5) →歴史的状況の変化: アテナイにとって二正面作戦の危機
- 460 デロス同盟軍のキプロス遠征・エジプト遠征 (~454)
- 454 エジプト遠征軍の壊滅とデロス同盟金庫の移設→歴史的状況の変化: アテナイにとって対ペルシア戦遂行の危機
- 454/3 エリュトライ及びミレトスの反乱 (~452)
- 451 キモーンの帰国
ペロポネネーソス同盟と5年間の休戦協定
- 450 キモーンの最後の遠征と死: 歴史的状況の変化: 和平への障害の消滅
- 449 (カッリアスの平和?)
- 446 コローネイアの戦いと中部ギリシアからアテナイの後退
エウボイア及びメガラ反乱。ペロポネネーソス軍のアッティカ侵攻。

446/5 三十年の平和条約

443 メレシアスの子トゥキュディデスの陶片追放・ペリクレスの一人
支配。

440 サモス及びビュザンティオンの反乱（～439）

433 アテナイとケルキュラの同盟。シュボタの海戦。メガラ法令

432 ポテイダイアの反乱（～430/29）。ペロポンネーソス同盟会議

431 ペロポンネーソス戦争勃発

「カッリアスの平和」 実在論の史料的根拠

エウリュメドーンの戦い直後の時期（前 460 年代）

（史料 1）

Plut. *Cim.* 13. 4: (主力艦隊が壊滅した為に支援艦隊として到着したフェニキア艦隊は) 宙に浮いてしまった。その為に彼らは一層茫然自失の状態に陥り艦船のすべてを失い、兵員の多くが共に壊滅してしまった。このようにしてこの戦いが大王の意志を打ちのめし、その結果、騎馬にしてギリシアの海から永遠に一日行程分遠去かり、青銅の衝角を舳先に取り付けた軍船に関してはキュアネアイとケリドニアイの内側を航行してはならないという、あの有名な平和条約を締結したのであった。

前 460 年代に平和条約が結ばれ、前 440 年代以降に更新された

（史料 2）

Souda, s.v. *Callias*: 「堅穴の金持ちのカッリアスはキモーンの時代に休戦協定によって確定した国境をアルタクセルクセスに追認させたのである。」

参考：キモーン・・・前 450 年死去

アルタクセルクセス・・・在位：前 465－424 年

キモーン死後の時期（前 449 年）

（史料 3）

Diod. 12. 4. 5: 「それ故アルタバズとメガビュゾスの傍にいた人々はアテ

ナイ人の所へ休戦協定について話し合いを求める使節団を派遣したのである。言い分を聞いたアテナイ人は、ヒッポニコスの子カッリアスが団長を務める全権使節団を派遣し、アテナイ人と同盟諸国の人々を代表してペルシア人と休戦協定を締結したが、要点は以下のとおりである。アジアにあるすべてのギリシア諸都市は独立自治たるべきこと、他方ペルシア人の総督たちは海まで三日以内の行程に降りて来てはならないし、軍船はファセリスとキュアネイアイの内側を航行してはならない。以上を大王とその諸将は実行し、アテナイ人は大王が支配する地に兵を進めてはならない。」

「カッリアスの平和」 懐疑論の史料的根拠：

(史料4) カッリステネスの否定

Plut. *Cim.* 13. 5: 「それ故カッリステネスはかの夷狄が以上のことを同意したというのを否定し、実際にはあの敗戦の恐れ of 気持ちの故にそうしたのであり、ギリシアの地から遠く離れていたのである、その為にペリクレスが 50 隻の艦船で、エフィアルテスが 30 隻でケリドニアを越えて航行したのに夷狄の側から艦隊が彼らを迎え撃つことはなかったのである。」

(史料5) クラテロスの証言への疑問

Plut. *Cim.* 13. 6: 「クラテロスがまとめた『民会決議集』の中に休戦協定の写しが実際に結ばれたものとして収められている。それでそれ故にアテナイの人々は平和の祭壇を建立し、使節として活躍したカッリアスを特に称えたのだと彼は述べている。」

(参考：エフィアルテスは前 461 年に暗殺されているし、平和の祭壇はナクソスの海戦の戦勝を記念して前 375 年に建設されているのでカッリアスが前 449 年に平和条約をペルシアと締結したという直接的な証拠にはならない。)

(史料6) テオポンポスの批判

Teopomp. F.154: 「テオポンポスは『フィリッピカ』の中で夷狄との協定は、アッティカ文字で碑文に刻まれておらずイオニア文字で刻まれている

ので、偽造されたものと述べている。」

実在論（前 449 年説）

G. L. Cawkwell, “The Peace between Athens and Persia”, *Phoenix* 51 (1997),
115-130.

R. Meiggs, “Appendix 8: The Debate on the Peace of Callias”, in: *The Athenian
Empire*, Oxford, 1972, 487-495.

L. J. Samons II, “Kimón, Kallias and Peace with Persia”, *Hist.* 47 (1998),
129-140.

実在論の異説（前 460 年代説）

E. Badian, “The Peace of Callias”, *JHS.* 107 (1987), 1-39.

懐疑論

C. Habicht, “Falsche Urkunden zur Geschichte Athens im zeitalter der
Perserkriege”, *Hermes* 89 (1961), 1-35.

H. B. Mattingly, “The Peace of Kallias”, *Hist.* 14 (1965), 273-281.

K. Meister, Ungeschichtlichkeit des Kallias Friedens und deren historische
Folgen, *Palingenesia* 18, Wiesbaden, 1982.

「カッリアスの平和」の背景にあるもの

（史料 7）前 4 世紀アテナイの海上帝国へのプロパガンダ

Isoc. *Paneg.* 117: 「彼らは自由と自治を奪われている、というのは或る者たちは僭主の下に置かれ、或る者たちをハルモステス（スパルタの在外監督官）たちが支配し、或る者たちは祖国を追われ、これらの者たちのうちの或る者たちを夷狄が主君として君臨しているのだ。我らはヨーロッパに敢えて渡り来たらうとしたのをそして彼らが分不相応にも奢り高ぶっていたのを成敗したのだ、」

118: 「その結果、彼らは我らに向かって遠征するのを止めたのみならず自らの領土が略奪されるのを我慢したのだ、そして 1200 隻の艦船で航行し

てきたのを無力化してしまい、その結果、彼らは軍船をファセリスのこちら側に全く乗り出さなくなり、おとなしく振舞い好機を待ち、現有の戦力に信頼を置く事が出来なくなってしまったのだ。」

119:「そしてそのような事態が我らの祖先の優秀性のお陰であったということは、ポリスの不幸がはっきりと示している。というのは我らが支配権を奪われたその瞬間からギリシアの人々にとって悪しきことの始まりとなったのだ。というのはヘッレスポントスで生じた敗北以降、別勢力が覇者の地位に着いた時、夷狄が海戦を戦って勝利を収め、海上を支配し、島嶼部の大部分を支配し、ラコニアに上陸し、キュテラを強奪し、ペロポネソスの全ての地に危害を加えながら周航したのだ。」

(史料 8) スパルタによる前世紀型の権力構造への提案

Xen. *Hell.* 6. 3. 14:「さて便宜性に言及するが、おそらく全てのポリスのうち或る者たちは我らに、他の者たちは諸君に心を寄せており、それぞれのポリスの中で或る者たちは親スパルタ政策を主張し、他の者たちは親アテナイ政策を展開している。さてもし我らが友人となれば、当然のことながら何処に厄介なものを予期するのか。というのは諸君が友人となれば陸上において誰が我らを苦しめることができるのだろうか。我らが諸君と友好的関係になればいったい誰が海上において諸君に危害を加えることができようか。」

前 4 世紀の文脈での理解

大王の和約を批判する文脈の中でアテナイがペルシアと結んだ条約が語られる。キーワードはイオニア諸都市の自由、総督の軍勢と艦隊の排除。